SRST の設定

- Survivable Remote Site Telephony の概要 （1 ページ）
- Survivable Remote Site Telephony の設定タスク フロー （2 ページ）
- SRST の制限 （6 ページ）

Survivable Remote Site Telephony の概要

Survivable Remote Site Telephony（SRST）は、Unified Communications Manager ノードとのワイドエリア ネットワーク（WAN）接続に依存するサイト用のオプション機能です。 SRST リファレンスは、Unified Communications Manager 管理インターフェイスで構成されています。 WAN の故障が発生した場合、IP ゲートウェイは、次のようにリモートサイトの IP 電話に限定されたテレフォニーサービスを提供することができます。

- リモート サイトの IP 電話は互いにコールできます。
- PSTN からのコールは IP 電話に到達できます。
- IP 電話からのコールは PSTN を介して外部に到達できます。

リモート サイトの電話が、関連付けられているすべての Unified Communications Manager ノードに接続できない場合、SRST リファレンスの IP ゲートウェイに接続します。 IP 電話のステータス行には、IP 電話がバックアップ SRST ゲートウェイにフェールオーバーしたことが示されます。 Unified Communications Manager への接続が復元されると、Unified Communications Manager と完全なテレフォニーサービスに再登録された IP 電話が復元されます。

SRST は、PSTN ゲートウェイ アクセスに加えて、SCCP および SIP エンドポイントが混在している可能性があるリモート サイトをサポートします。

接続モニタ間隔

ワイドエリア ネットワーク（WAN）を介して SRST ゲートウェイに接続する IP 電話は、WAN リンクを介した Unified Communications Manager との接続を確立できると直ちに Unified Communications Manager に再接続します。 ただし、WAN リンクが不安定な場合、IP 電話は SRST に切り替えたり、 Unified Communications Manager に切り替えたりします。 このため、電話サービスが一時的に失われます（ダイヤル トーンが聞こえません）。 このような再接続

試行は、WAN リンク フラッピング問題と呼ばれ、IP 電話が Unified Communications Manager に正常に再接続するまで続きます。

Unified Communications Managerと SRST ゲートウェイの間で WAN link flapping の問題を解決するために、SRST ゲートウェイおよびレジスターから Unified Communications Manager に対して登録解除されるまで、Unified Communications Manager に対する接続を IP 電話が監視する秒数（接続監視時間）を定義できます。 IP 電話は、XML 設定ファイルに指定された接続モニタ間隔の値を受信します。

Survivable Remote Site Telephony の設定タスク フロー

始める前に

ダイヤル プランを検証します。 ダイヤル プランに 7 か 8 桁の数字があるとき、場合によりトランスレーション ルールを設定する必要があります。 トランスレーション ルールの詳細については、「トランスレーション パターンの設定」を参照してください。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	SRST 参照の設定 （3 ページ）	他のすべての Unified Communications Manager ノードに到達できない場合に、制限付きのコール制御機能を提供するゲートウェイを設定します。
ステップ 2	デバイス プールへの SRST リファレンスの割り当て （3 ページ）	Unified Communications Manager が使用不可になった場合、通常デバイス プールに割当てられる SRST 参照により、発信側デバイスが発信を完了しようとするときに検索するゲートウェイが決定されます。
ステップ 3	次のいずれかの作業を実行します。 • クラスタの接続モニタ間隔の設定 （4 ページ） • デバイス プールの接続モニタ間隔の設定 （4 ページ）	**任意**：接続モニタ期間を設定します。クラスタ全体のデフォルト値を適用することも、デバイス プール内のデバイスに設定を適用することもできます。
ステップ 4	SRST Gateway の SRST を有効にする （5 ページ）	ゲートウェイで SRST パラメータを設定します。

SRST 参照の設定

SRST リファレンスは、デバイスのその他すべての Cisco Unified Communications Manager ノードが到達不能の場合に、Cisco Unified Communications Manager の一部機能を利用できるゲートウェイで構成されます。

手順

ステップ 1 Cisco Unified CM Administration にログインし、**[システム（System）]** > **[SRST（SRST）]** を選択します。

ステップ 2 [新規追加] をクリックします。

ステップ 3 [SRST リファレンスの設定（SRST Reference Configuration）]ウィンドウの各フィールドを設定します。 フィールドと設定オプションの詳細については、システムのオンライン ヘルプを参照してください。

ステップ 4 **[保存]** をクリックします。

デバイス プールへの SRST リファレンスの割り当て

電話機の各デバイス プールに SRST を設定できます。 デバイス プールに SRST リファレンスを割り当てると、デバイス プールのすべての電話機が、Cisco Unified Communications Manager のノードに到達できない場合、割り当てた SRST に接続を試みます。

手順

ステップ 1 Cisco Unified CM Administration から、**[システム（System）]** > **[デバイスプール（Device Pool）]** を選択します。

ステップ 2 [検索（Find）]をクリックし、リモート IP 電話が登録されているデバイス プールを選択します。

ステップ 3 [ローミングに合わせて変化する設定（Roaming Sensitive Settings）] エリアの [SRST リファレンス（SRST Reference）] ドロップダウン リストから SRST を選択します。

[SRST リファレンス（SRST Reference）] ドロップダウン リストには次のオプションがあります。

- [無効（Disable）]：電話機は、Cisco Unified Communications Manager のいずれのノードにも到達できない場合、SRST ゲートウェイへの接続を試みません。
- [デフォルト ゲートウェイを使用（Use Default Gateway）]：電話機は、Cisco Unified Communications Manager のいずれのノードにも到達できない場合、IP ゲートウェイを SRST ゲートウェイとして接続を試みます。

- [ユーザ定義（User-Defined）]：電話が任意の Cisco Unified Communications Manager ノードに接続できない場合、SRST ゲートウェイへの接続を試みます。

ステップ 4 **[保存]** をクリックします。

クラスタの接続モニタ間隔の設定

この手順は省略可能です。 接続モニタ間隔のシステム値（エンタープライズ パラメータ）を変更する場合だけ、この手順を完了します。

手順

ステップ 1 Cisco Unified CM Administration から、**[システム]** > **[企業パラメータ]** を選択します。

ステップ 2 [接続モニタ間隔（Connection Monitor Duration）]フィールドに値を入力します。 デフォルト値は 120 秒です。 フィールドに入力できる最大秒数は、2592000 秒です。

ステップ 3 **[保存]** をクリックします。

（注）
変更を有効にするにはすべてのサービスを再起動する必要があります。

このエンタープライズパラメータには、接続モニタ期間に対するクラスタのデフォルトを設定します。ただし、それよりも優先される設定がデバイス プールに存在する場合、その設定が、デバイスプールを使用するデバイスのエンタープライズパラメータ設定よりも優先されます。

デバイス プールの接続モニタ間隔の設定

この手順は省略可能です。 この操作は、次の項目に該当する場合に限り実行します。

- 接続モニタの期間について、クラスタ全体の値を使用しない場合。
- このデバイス プールの接続モニタ期間の値を個別に定義する場合。

ヒント デバイス プールの接続モニタ間隔の値を変更する場合、値は更新されるデバイス プールだけに適用されます。 その他すべてのデバイス プールは、各自の [接続モニタ間隔（Connection Monitor Duration）] フィールドの値を使用するか、[接続モニタ間隔（Connection Monitor Duration）] エンタープライズ パラメータで設定されたクラスタ全体用の値を使用します。

手順

ステップ 1 Cisco Unified CM Administration から、**[システム（System）]**>**[デバイス プール（Device Pool）]** を選択します。

ステップ 2 [検索（Find）]をクリックし、リモート IP 電話が登録されているデバイス プールを選択します。

ステップ 3 [ローミングに合わせて変化する設定（Roaming Sensitive Settings）] エリアで、[接続モニタ間隔（Connection Monitor Duration）]フィールドに値を入力します。 フィールドに入力できる最大秒数は、2592000 秒です。

（注）
この設定は、エンタープライズ パラメータの接続モニタ間隔設定をオーバーライドします。

ステップ 4 **[保存]** をクリックします。

SRST Gateway の SRST を有効にする

始める前に

- デバイス プールへの SRST リファレンスの割り当て （3 ページ）
- オプションで次の作業を行うことができます。
  - クラスタの接続モニタ間隔の設定 （4 ページ）
  - デバイス プールの接続モニタ間隔の設定 （4 ページ）

手順

ステップ 1 SRST gateway (ルータ) にログインします。

ステップ 2 **Call-manager-fallback** コマンドを入力します。
このコマンドは、ルータの SRST を有効にします。

ステップ 3 **max-ephones**max-phones コマンドを入力します。ここで、max-phones は、サポート対象の Cisco IP Phone の最大数です。

ステップ 4 **max-dn**max-directory-numbers コマンドを入力します。ここで、max-directory-numbers は、ルータでサポートされているディレクトリ番号（DN）の最大数または仮想voice-portです。

ステップ 5 **ip source-address**ip-address コマンドを入力します。ここで、ip-address は、一般的にルータのイーサネット ポートのアドレスの 1 つであるルータ IP アドレスよりも前から存在します。

このコマンドにより、SRSTルータは、指定されたIPアドレスを介してCisco IP 電話からメッセージを受信することができます。

SRST の制限

制約事項	説明
SRST 参照先の削除のヒント	デバイスプールなどの項目が使用しているSRST参照先は削除できません。 SRST リファレンスを使用しているデバイスプールを調べるには、**[SRSTリファレンスの設定（SRST Reference Configuration）]** ウィンドウから **[依存関係レコード（Dependency Records）]** リンクをクリックしてください。 システムで依存関係レコードが有効でない場合、[依存関係レコードサマリー（Dependency Records Summary）] ウィンドウにメッセージが表示されます。使用中のSRSTリファレンスを削除しようとすると、Unified Communications Manager にエラーメッセージが表示されます。現在使用中のSRST参照を削除する前に、以下のいずれかまたは二つのタスクを実行してください。 • 削除するSRST参照先を使用しているデバイスプールすべてに、別の SRST 参照先を割り当てます。 • 削除するSRST参照先を使用しているデバイスプールを削除します。 （注） SRST 参照先を削除するときは、削除する SRST 参照先が正しいか慎重に確認してください。 削除した SRST 参照先を元に戻すことはできません。 誤って削除した場合は、その SRST 参照先を作成し直す必要があります。

翻訳について
このドキュメントは、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。